
M a g i c l n o t e—マジカルノート—

まじかる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M a g i c l n o t e ―マジカルノート―

【Nコード】

N 6 3 5 2 A

【作者名】

まじかる

【あらすじ】

友との友情を描いたバトルファンタジー。

ブローグ

1、ブローグ

あなたには大切な人がいますか？

もしも、大切な人が闇に落ちたらどうしますか？

これは、ある少女と、ある少女のバトルファンタジー。

第1P でこぼこコンビ

「レイ、起きてっばー!!」

狭い家に響く声。なかなか起きないレイに腹を立てているらしい。ドアを叩く音も聞こえてきた。申し遅れたが、ドアを叩いているのは第二の主人公、山下咲である。何度叩いても、まるで応答なし。もう怒りが頂点に達しそうになった頃、ドアの向こうから眠そうな声が聞こえてきた。

「ふわああ…。んー…」 サクはため息をつき、ついにドアを開けた。ードカツ。

「?」

と首を傾げ、中を見ると、そこには伸びている月中鈴が。どうやら、サクがドアを開ける前に、レイがドアを開けようとしたのだろう。サクはレイに駆け寄る。

「わわっ、ゴメン、レイ。大丈夫?」

呼びかけてみても、返事はない。あまりの展開にサクはおろおろしだす。どーしよう、どーしようとレイの周りをうろろしていると、背後から声が聞こえてきた。

「…オメー、何しやがる…(怒)」

かなり怒っているようだ。サクはおそろおそろ顔を後ろに向ける。案の定、怒ったレイが本を持って立っていた。サクは身震いする。

「れ、レイ、ゴメン、ゴメン!ゴメンっばー!!」

必死に謝罪の言葉を述べるが、レイは無言で本をサクの頭に振り下ろした。サクの頭に激痛が走る。

「っ……………」

痛みにたえ、レイに用件を言う。

「朝ご飯できたから呼びに来ただけど…」

レイは本をしまい、サクの前に立つ。まだ、怒っているようだ。怒っているレイは、サクにとって正直怖い。

「…まったく、朝から腹の立つ…」

ぶつぶつ言っているレイを、サクはうながす。それも、手首をギュッと握りながら。

「はっ、早く食べよっ。」

レイは引きずられながら、文句を言う。

「…オイ、離せ。1人で行く。」

レイの言葉に、サクは

「えっ…」

と口を尖らせるが、また怒られるのも嫌なので従う。レイがふらつく足取りで歩き出したその時、玄関のチャイムが鳴った。

「！」

「！依頼かな！？」

サクは依頼。仕事が来たと目を輝かせるが、レイは

「めんどくせエナ…」

とつまらなそうに言った。その時、レイのお腹がぐう、と鳴った。

「…オレは飯を食ってくる。客の対応、ちゃんとしろヨ。」

サクはもう…と呟きながらも、玄関の方へ向かって行った。

サクが対応している間に、ご飯を食べ、着替えなければならない。さっそく、キッチン（キッチンに置いてあるテーブルと椅子を使って食べるのである）へ向かう。

今日、テーブルの上が上がっていたのは、”ご飯、夕べの残りのエビフライ、サクが作ったのだらう、ポテトサラダ、味噌汁”の4点だった。レイはドカッと椅子に座り、食べ始める。最初はご飯を、ものすごい速さで平らげ、次はエビフライ、味噌汁、ポテトサラダの順で食べていった。

第2P 黒い生き物の正体

その頃、客間では、サクが必死に対応していた。依頼人は学生らしい。サクは緊張しながらも、しっかりと用件を聞こうとする。「え、え」と、まず、自己紹介しようか。私は、山下咲。んで、上司が月中鈴。サクとレイでいいよ！それで、あなたは…？」

サクが少女をうながすと、少女はおもむろに口を開いた。

「…田口…田口蘭…。」

無愛想な依頼人だ。サクは、瞬時にひいたが気を取り直して尋ねる。こういう仕事では、基本中の基本だ。

「え、えと、ランちゃんは一体どんな用得…。」

「魔法つて、得体の知れないモノでも排除出来る…？」

突然の質問に、サクは多少ビクつきながらも答える。

「え？う、うん、まあね。」

「なら、私の部屋に現れる、得体の知れない生き物を倒して…！！」話しながら、ランは泣き出した。よほど怖かったのだろう。サクは内心慌てるが、気を取り直してまた尋ねた。

「お、落ち着いてランちゃんっ。その黒い生き物つてのは、いつ頃現れるの？」

ランは泣きじゃくりながら答える。

「…たっ、確か、2時頃だったと思う…。」

「夜中の？」

サクの確認に、ランは頷く。その後、申し訳無さそうに言った。

「…でっ、でもっ、なんかインチキ臭いね…。」

「あ、やっぱり？」

いつも言われることなので慣れている。説明するしかないか…。

「…え」とね、まず説明しようか…

「ヒヒッ、話だけじゃナ。実演してやろうか？めんどくせエけどさ。」

サクが説明しようすると、着替えたレイが割り込んできた。さすが、レイの前に手を出す。

「あ、こっちが上司のレイね。」

レイはそんなことには気にもせず、ランに向き直る。

「…机がジャマだな…。サク。」

「?うん。」

指示通りに机をどかし始める。机をどかしながらレイに聞いた。

「で、でもさ、実演たって今は…」

「うるせエ、黙ってる。」

サクの言葉を遮り、ランに言う。

「オメエ、燃えて無くなってもいいモノ、持ってるか？」

ランは涙を拭いながら、ポケットから紙切れを取り出した。

「…これでいい？」

レイは頷き、本を取り出した。本の表紙には、魔法陣が描かれている。魔本だ。魔法使いが必ず持っている本。本を開き、呪文を唱えた。

「フレイム！」

唱えると同時に、火の玉が現れ、紙切れを燃やした。ランは啞然とする。レイが本を閉じながら言う。

「ホラよ。コイツが魔法だ。…1つ聞くが、オメーの家はどこだ？」

ランはためらいながらも答えた。

「…この町の…10番地…」

…この日の夕方…。レイとサクは、ランの家の前に立っていた。サクがヒソヒソ声で言う。

「ここだね…ランちゃんの家。」

レイは無言でチャイムを鳴らそうとした。が、サクが

「ちょっと待って。」

と言って止める。

「れ、レイ、あのさっ、本当にランちゃんの部屋で待ち伏せするの？」

サクの問いにレイは、面倒くさそうに答える。

「当たり前だろ。それとも何か？オメー一人で行くか？」

サクは右手を左右に振り、否定する。

「いつ、いや、それはちょっと…だってホラ、ランちゃんにケガでも負わせたりしたら…」

サクの言葉に、レイは訝しげな顔をする。サクはビクツとした。

「ふーん、サク、オメー誰に向かって意見してんだ？」

言葉につまりながらも、しっかりと答える。また怒られるのはイヤだからだ。

「…魔法使いレイ…」

「ケツ、カスが。」

ここで説明しておくが、魔法使いには五つの階級がある。階級が高い方から言くと、”魔法使い、魔法官、準魔法官、魔法書記官、準魔法書記官”となる。その五つの階級にあてると、レイは魔法使い、サクは魔法書記官となる。…話を戻そう。

「…ムダ話はいいい。」

レイは言いながら、チャイムのボタンを押す。少しすると、ランが現れた。ホツとしたような顔をしている。当たり前か。今日で得体の知らない生き物とおさらばできるのだから。

「あ、あのっ、レイさんにサクさんよね？どうぞ入って。」

二人は言われるがまま、中に入る。

中は、レイとサクの家より広かった。

だが、どこか寂しいような感じがした。二人はランの部屋に案内してもらい、黒い生物を待ち伏せする。ランには悪いが、別の部屋に行ってもらうことにした。もちろん、サクの家だ。レイは正直、どちらでも良かった。サクがあまりにも言うので、仕方なくこうなっていたのである。二人が待ち伏せを始めてから、数時間が過ぎた。

「今、何時だ。」

レイが眠そつな声で言う。サクは時計に目をやり、キツパリと言っ

た。

「二時五分。おかしいね。続けて二時に出たって言ってたのに。」
また、アクビをする声が聞こえた。サクは苦笑し、溜め息をつく。

「…妙だ。」

突然、一人言のようにレイが言った。サクは、レイの言葉に耳を傾ける。

「時間に関係なく出てくるヤツらなのに…。さつさとランを襲えばいいのにしない。…わからん…。」

レイは言い終わると、眠ってしまった。サクはまた溜め息をつき、
呟く。

「しょうがないなあ、私が見張つとくからね…」

どれくらいたつたのだろう。サクは揺さぶられて目が覚めた。寝ぼけまなこで顔を上げる。レイが閉じそくな目でこちらを見ていた。

「何…?」

と言って起き上がると、レイが前を指差す。

「オイ…これはどーいうコトだ?」

「!」

前を見ると、黒くて丸い生き物がいた。サクは慌てて立ち上がる。

「し、しまった、寝ちゃってた…。でもあれって…」

レイも立ち上がり、黒い生き物を睨みつけた。

「そうだ。コイツはティクモ。古代に存在したと言われる生き物だ。」

「

言いながら、本を開く。その時、ティクモがカパツと口を開けた。

サクは?を浮かべる。ティクモの口から炎が吐き出された。慌てて
交わそうとするが、もう遅い。

「あ…!わああ!」

サクが叫び声を上げた。とつさに、手で頭をかばう。と、その時、
どこからかレイの声がした。

「アホめ。面倒を増やすナ。」ストーン・シールド」!」

レイの声と共に、ドーム型の盾が現れる。ティクモの炎をアツサリ
防御し、消えた。気がつく、レイが隣にいた。ティクモがオロオ
ロしている隙に仕留めるらしい。ティクモが何もしてこないのを見
計らって呪文を唱えた。

「ウォーター+！」

水の玉が出現し、ティクモに撃沈した。ティクモが消滅する。サク
はホッと胸をなで下ろす。

「……ふう……。これで一件落着だね……。」

レイは歩きながら、サクを見る。

「フン、一つ聞くが、オメーはなんでココに来たんだ？」

「え？そ、それは……」

言葉につまったサクを残し、レイは言ってしまう。レイの背中を追
いかけながら、思った。

（あ……そういえば、ランちゃんに何も伝えてないや……）

サクはクルリと向きをかえ、紙に何か書き出した。

『ランちゃんへ。』

約束通り、黒い生き物を倒したよ！もう現れないから安心してね。

レイ& amp ;サクより。』

「できたっ！」

小さく呟いて、書いた紙を机の上においた。そして、ランの部屋を
後にする。

玄関から出ると、レイが立っていた。ムスツとしている。

「……遅かったじゃねエか。もう用はねエな？」

レイの言葉に小さく頷く。依頼人に二度会ってはいけない……。レイ
のルールの一つ。簡単に言つと、もうランと会ってはいけない……。

サクは沈んだ気持ちのまま、歩き出した。

数日後。ドアがノックされている。だが、誰もでない。ノックしている相手が分かるから。ランはこのところ、毎日来ている。

「あつ、もうこんな時間！遅刻しちゃう！」

と、呟いて、走り去ってしまう。大抵の場合、サクはサクでホツとしていた。

（ランちゃん、元気そう…）

そう思つて暖かく見守ることにしたのである。だが、この日に限つていつもと違う所があった。ドアの後ろに、何かヒラヒラした物がついている。サクは不思議に思い、ドアを開け、そのヒラヒラした物を見た。それには、こう書かれていた。

『レイさん&サクさんへ。』

先日はありがとう！！あなたたちのおかげで、充実した日々を過ごしています。本当にありがとうございました。

田口蘭より。』

サクはその手紙を見て微笑んだ。本当に良かった。ランちゃんの力になれて。と、その時、サクの頭にある疑問が浮かんた。変装して会つてはだめだろうか…？だめでもともと。サクは実行しようとした。いつもとは違うワンピースを着て、長い髪を縛る。よし、行く！ドアを開けようとした時、ふいに声がかかった。

「どこに行く気だ？このアホタレめ…！」

レイだ。レイしかない。サクは焦りながら言う。

「ち、ちよつとランちゃんに挨拶を。おっかしいな、レイは魔法使つたら三日は起きないのにな。」

「ああん？」

サクの言葉に気にした風もなく、レイはマンガ本をひろげる。

「なつなにさあ、変装すれば一度くらい会つてもいいでしょあ？」
読みかけたマンガから顔を上げ、レイは嫌みたっぷりに言う。

「バーカ、オメーの変装なんざ、丸分かりだつてーの。」
レイの言葉に、サクはガツクリと肩を落とす。また、新たな一日が
始まる。どうか、平和な一日でありますように…。

第3P 優子おばあちゃん

あれから（ランの一件）数日がたった午後。サクが財布の中身を見、ため息をつく。ランの一件はただ働きだったため、残金は1500円。ランからもお金を貰うべきだっただろうか？まあ、今更気づいても遅いのだが。

「はあ……。ねえ、レイ、夕飯さ、おかず抜きじゃだめかなあ？」
サクの問いに、レイは魔本をカジカジとみながら答える。

「アホか。ふりかけでもいいーから買ってこい。」

レイのマヌケな姿に、内心では苦笑しながらも、ドアを開ける。ドアの向こうには、一人のおばあさんが立っていた。だが、サクには、そのおばあさんが幽霊に見えたらしい。悲鳴のような声を上げ、ドアを閉める。

「わああー！ゆっ幽霊ー！？」

「アホか。ただのバアさんだ。入れてやれ。」

レイに言われ、渋々中に入れた。

「本っ当にゴメンナサイツ、倉木優子さんっ！」

ドアが開いて、いきなり閉まったのだ。よほどビックリしたに違いない。素直に謝罪の言葉を述べるサクに、おばあさんは

「いいんですよ。」

と言って続けた。

「まず、これと言ってはなんですけど、シチューを召し上がって下さいな。」

言いながら、風呂敷を開ける。中には、鍋に入ったシチューが。二人はよだれをたらし、さっそくご飯に盛り付ける。

「簡単だけど、誠実な広告を見て来たんですよ。」

おばあさんが取り出したのは、サクが作った広告。広告には、こう書いたハズだ。

『得体の知れない生き物でお困りの方、相談承ります。
発行者 山下咲』

「でも、その魔法っていうのはどうもインチキくさくてねえ…」

サクはシチューを食べていた手を止め、また言われた…と内心で思いながら、説明を始める。

「あ、そうですね。ご説明致します。ええと、魔法っていうのは、困っている人を助けるために必要な力で、得体の知れない生き物を片付けることができるんです。それで、この事務所の上司がこの人なんです…」

説明の途中で、レイにチラリと目をやる。レイはシチューを食べるのに夢中になっていた。

「…肉がねエ。」

何を言い出すのかと思えば…、とサクは思いながら、レイを軽く小突く。パシッという音がした。

「それで、その相談っていうのは、家に黒い生き物が出るようになってしまつて…。それが、一力所だけじゃないんです。家の至る所に…」

おばあさんは言いながら、涙ぐんでいた。

「数年前、夫が亡くなつたんですケド、写真を…盗まれてしまつてね…」

おばあさんの説明が終わると、レイは真剣な顔になる。

「…他に何か変わったことは…？」

「変わったこと？ああ、家の周りの木を切つて、花を植えましたが…」

その日の夜。夕飯を食べ終わった後、おばあさんの家に向かった。

おばあさんの家についた途端、レイが低い声で言った。

「…何で、テイクモが現れるようになったか、分かるか？」

レイの問いに、サクは首をふるふると左右に振る。レイは

「だろうナ…」

と呟いて続ける。

「木はテイクモの住みかだったんだ。それを切っちまったからナ。」
レイの言葉に、サクはポンと手を叩く。

「そっか、テイクモのすむ場所がなくなっちゃったんだね！」

「まあ、そういうことだ。」

と呟きながら、チャイムをならす。少しすると、おばあさんが出てきた。パジャマ姿だ。当たり前だろう。

「どうぞ、入って。」

言われた通り、中に入る。中は思ったよりも広かった。一人で住むには、広すぎると言ってもいいだろう。二人は客間に通された。

「バアさん、どこで見たんだ？」

「ええと、キッチンの窓だった。外からびっしり張りついてて…」

レイの問いに慎重に答えるおばあさん。レイは

「台所か…」

と呟くと、顎に手をあてる。恐らく次に現れるのは…。

「…おばあちゃん、後やっとくから寝てて下さい。」

サクに言われ、

「そうかい？」

と言うおばさん。少し説得したら、自分の部屋に戻ってくれた。ホツと一息つくサク。

「レイ、次現れる場所は分かった？」

レイは小さく頷き、ニヤリと笑う。

「恐らく、ココだ。」

意外な返事に、サクは不安になる。客間…？

「ええ！？ウソォ！」

とっさに言ったものの、やっぱり出そうな気がする。しばらく、沈

黙が続いた。

「――！オイ。」

沈黙を破ったのはレイだった。サクはレイに視線を向ける。

「……もうすぐ来るゾ。覚悟しとけ。」

サクは頷く。やっと現れる。そう思うと、サクは緊張してきた。一体、どこから現れるんだろう……。窓の揺れる音が聞こえる。サクは一瞬ビクツとしたが、すぐに風だと思い直した。ふと窓を見ると、丸くて黒い生き物が。

「えっ！も、もしかして……」

「ヒヒツ、後他にどれがある？」

レイの言葉に、サクは慌てて首を左右に振る。間違いない。あれだ。「ん？」

サクはあることに気づいた。ティクモの数が一匹ではない。一、二、三……五匹はいる。レイは本を取り出し、窓を開けた。ティクモがこちらを見ている。

「……フン、ザコが。」

レイは呟くと、窓から飛び降りた。ティクモとの距離が縮まる。サクも降りて、レイの近くに行った。

「……どうするの？五匹もいるよ？」

ヒソヒソ声で尋ねると、レイは

「黙れ。」

とだけ言った。サクは少々、面白くない気持ちになる。二人を、五匹のティクモが囲む。五匹が同時に炎を吐き出した。レイは冷静な口調で、

「ストーン・シールド！」

と言った。ドーム型の盾が炎を防御する。だが、盾はどんどん赤くなっていく。

「れ、レイ、まずいんじゃない……」

「ごちゃごちゃ言うナ。ウォーター！」

水の玉が現れ、急激に冷やされた。そのおかげで、盾は元に戻っていく。と、突然、炎がやんだ。サクは首を傾げる。

「あれ…？炎が…」

「…！」

レイが本を閉じ、シールドを消した。そして、他の呪文を唱える。

「ウォーター＋、ダブル！」

四匹のテイクモに当たり、消滅する。あと一匹。レイは、残り一匹になったテイクモに狙いを定める。

「ウォーター！」

見事に命中し、仕事は終わりを告げた。レイは本を閉じ、歩き出した。サクは後に続こうとしたが、何かを見つける。

「ん？」

と不思議に思つて、下に落ちていたキラリと光るモノを手にとった。

「！これって…！」

サクは小さく呟く。落ちていたのは、おじいさんの写真。笑っている。きつと、おばあさんの夫だろう。サクは写真をまじまじと眺める。楽しそうだな…。その時、遙か前方からレイの声がした。

「オイ、何してやがる。置いてっちまうゾ。」

「い、今行くつてば！」

サクは写真をポケットにしまい、駆け出した。

レイに追いついたサクは、拾った写真を見せた。

「恐らく、あのバアさんのだろうナ。渡してくるか。めんどくせエけどさ。」

「そ、そうだね。起こしちや悪いかな…？」

サクは迷い始める。だけど、起こさないとお金が貰えない。財布がピンチなのだ。起こすべきか、起こさないべきか悩んでいると、部屋からレイの声が聞こえてきた。

「オイ、起きてくれヨ。」

レイが揺さぶる姿を想像し、サクは苦笑してしまう。おばあさんはうつすらと目を開けた。歪む視界の中で、おばあさんはゆっくりと起き上がった。その時、やっとサクが到着する。

「？」

目をこすりながら、首を傾げるおばあさんに、サクは写真を差し出した。おばあさんは写真を見るなり、嬉しそうな顔になった。おばあさんの目から涙がこぼれ落ちる。

「おじいさん……」

サクも涙ぐんでしまう。良かったね、おばあちゃん……。おばあさんからお金を貰い、家を後にする。

翌朝。サクとレイは言い合っていた。

「ええ？今回もダメなの？」

「くどい。」

レイはベッドに横になったまま、答える。サクは

「ちえ……」

と呟くと、ドアに手をかけた。

「はあ……買い物にでも行ってこよ……。」

「おーおー、行ってこい。コレでやっと寝れるぜ……」

レイの部屋を背中中で聞きながら、ドアを開ける。

「ちえっ、寂しいもんだね……」

ドアの向こうにはおばあさんが立っていた。

「おばあちゃんっ？」

サクが呟くと、おばあさんがそれに答えるように言う。

「シチューはいかが？」

サクが嬉しそうに言う。

「いやったあー！レイ、シチューだよお！」

サクの言葉に、閉じかけていた目を開ける。

「んあっ…うるせえなあ…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6352a/>

Magicalnote—マジカルノート—

2010年12月14日20時05分発行